

## 旅の裏側

東京都杉並区 松山 泰生

一、

「お祖父ちゃん！ 生きてる!？」

玄関が騒がしいと思つたら、書斎のドアが開き顔が覗いた。孫の千鶴である。

「元氣そうだね」

千鶴は、祖父を舐めるように見て言った。

「この様子なら、当分大丈夫だね」

何という言い草と思つたが、腹は立たない。口は悪いが毒がないことは、泰造自身理解しているからだ。

「いい年齢をして、騒々しい。もう少し静かにできないのか」

「地よ。我が家の血統だから仕方がないよ」

千鶴は、祖父の小言を軽く一蹴すると改まった顔になった。「ねえ。ちよつといい?」

「どうした」

泰造は身構えた。「ママに何か、入れ知恵されて来たか」

千鶴の母親、つまり泰造の長女は、この家を売りがっている。親の財産を整理しての生前贈与を考えているのだ。間もなく卒寿を迎える泰造にしてみれば、亡妻との思い出が詰まったこの家を

手離すつもりはないが、家族は〈売りたい派〉だから油断できないのだ。

「お祖父ちゃんは、ママを誤解している」

千鶴は、祖父を軽く窘めた。「ママは、お祖父ちゃんの健康を考えて、同居した方がいいと考えているのよ。お祖父ちゃんは難しい人だから、一緒に暮そうなんて普通考えないよ。お祖父ちゃんは自分がいくつか分かっているの?」

分かっているさ。それがどうした。

泰造は腹の中で舌打ちした。彼としては、年齢のことをとやかく言われるのが一番不快なのだ。健康だから放っておいて欲しいのだ。

そんな祖父の気持ちなど無視して、千鶴は続けた。

「今日は、私自身の用事で来たの。そうでなければ、わざわざ来ないよ。お祖父ちゃんにコロナを感染したら大変なもの」

だったら、来るな。と咎める暇もあらばこそ、千鶴は祖父の懐に潜り込むように坐り込んだ。

彼女が祖父に頼み事をする際には、必ずこの姿勢を執る。幼い頃からのルーティンなのだ。だから泰造は、急いでデイフェンスを固めた。

二、

泰造には五人の孫がいる。彼としては〈愛情は平等に〉を心掛

けているつもりだが、正直なところ千鶴が一番可愛い。

家族はそのことを見抜いていて、祖父の懐が目当ての時には千鶴を利用しがちだから、その点でも油断できないのだ。

そもそも千鶴は、松浦家の〈変わった子〉であり〈厄介な子〉だった。

幼い頃は虫が遊び相手で、蟻を飼ったり蝶を育てたり。ある時にはフンコログシを食卓の上で転がして、母親を失神寸前まで追い込んだ。

小学部ではゴキブリを追い回し、素手で捕えて得意がった。

中等部では「獣<sup>けもの</sup>つて、どうして漢字一文字なのかしら」と言い出して、家族だけではなく教師まで困惑させた。

犬・猫・牛・馬・虎・猿・熊……。言われてみればその通りだから、家族は〈困った時には祖父頼り〉と泰造に期待したが、彼だって応えられない時がある。

泰造は仕方なく「一文字とは限らないさ。たまたまだよ」と逃げを図ったが、千鶴は「狐も狸も。鯨も一文字だわ。そういえば魚も一文字が多い気がする」と追究の矛先を緩めようとせず、周囲を大いに悩ました。

そんな調子だから、家族は彼女を変人扱いし、一体誰に似たのかと詮索し合った末に、祖父似ということを決着したが、当の泰造だけは孫の性向に〈何か非凡なもの〉を感じ、秘かに期待しているのだった。

彼が特に注目しているのは、彼女の囲碁に対するセンスだった。手解きしたのは泰造自身だが、碁会所五段が自慢の彼が黒石を

持たされるのに三年とかからなかった。この勢いでは〈コミの解消〉も時間の問題だから気が気ではない。それでも将来はプロ棋士にと夢見ても、当の本人は「碁は趣味。将来はUFOを研究するの」と全く欲がない。

そんな千鶴も、小遣いを無心する時には外の孫と変わらないが、法外な要求を平気でする外の孫と比べれば、樋口一葉の一枚も奮発すれば、小躍りして喜ぶ千鶴はやはり可愛い。

だが、今日の彼女は小遣いが欲しい訳ではなさそうだ。

「で？ 要件は何だ」

泰造は、そろりと探りを入れた。「お前達が、どう思っているか知らないが、お祖父さんは、結構忙しいのだよ」

それは、嘘ではない。

彼は五十年間、編集人として生きて来た。出世こそ平取止まりだったが、編集人としては良い仕事をしてきた自負がある。停年後も仕事を続けたが、妻に病いが発見されたのを機に引退した。

引き継ぎしなければならぬ資料の整理や地元図書館に寄贈予定の蔵書の選別は、全く進捗していない。

「碁ばかりしているからよ」と千鶴は笑ったが、すぐに表情を改めて言った。「お祖父ちゃんなら、きつと助けてくれると思ったから来たの。相談に乗ってくれる？」

そして千鶴は反応を測るように祖父の目を覗き込んだ。

「一体、何を助けると言うのだ」

こんな真剣な孫を見るのは久しぶりだから、泰造は緊張した。この孫は真つずぐな性格だから周囲まわりと衝突し兼ねないのだ。

「さらしなのにき」

突然、千鶴が囁いた。

「え？」

「さらしなのにき」

もう一度、彼女が呟いた。

「何だつて？」

「さらしなの、にき」

〈の〉と〈に〉の間に、明らかに読点とうてんが入った。

「それつて……。更級日記のことか？」

「当たり前！」

千鶴は嬉しそうだった。「但し、日記にっきではなく日記にきと読んで欲しい。その方が、らしいでしょ」

らしいか。成程。しかし、千年も昔に編あまれた回想録が孫とどのようにつながるのか。その点が分からない。泰造は混乱した。

#### 四、

「二年振りに学園祭が開かれることになったのよ。私達は、朗読劇を上演することになったつて訊」

そういうことか。学園祭の演目に更級日記を採り上げることになった。そういうことなら納得できる。

「学園が、やっと学園らしさを取り戻すということよ。コロナのせいで、私達がどれ程辛い目に遇っているか。お祖父ちゃんに分かるかしら」

「分かるさ」

コロナ禍は学園だけの問題ではないのだ。

「でもね。今度の学園祭が成功すれば、中止になっている体育会も修学旅行も復活する。上級生は、本当に可哀想だったもの。修学旅行にも行けずに卒業そつぎょうしたのよ。先輩達、泣いていた」

泰造は、遠い昔を思い出していた。彼自身も修学旅行には縁がなかった。

小学校は大戦の真まつ直中ただなかだった。修学旅行は中止になり、その代わり校庭を耕して芋を育てた。

中学校には疎開先で編入した。「今日からお前達は皇軍の立派な少年兵だ。」と在郷軍人に尻を叩かれながら松の根を掘った。松根油はゼロ戦の燃料と教えられたが、どれ程役に立ったのかは模糊もことしたままだ。

高校の修学旅行も行けなかった。正確には行かなかったのだ。旅行の前々日に中兄すくのおにが死んだ。〈予科練帰りの肺結核〉だった。優しい兄だった。

「一生の思い出だから行ってこい」

長兄はそう言ってくれたが、そんな気にはなれなかった。これらのことは、今でも心の深いところに蟠わたかまっている。

コロナと戦争は、ある意味似ていると泰造は思っている。戦争も憎いが、コロナも憎いのだ。

二〇一九年十二月。ウイルスに汚染したクルーズ船ダイヤモン  
ド・プリンセス号が横浜港に接岸したのが、我が国におけるコロ  
ナ禍の始まりだった。コロナ・ウイルスは瞬く間に日本の全土を  
席捲した。

学園が例外である筈がない。主要な行事は悉く中止に追い込ま  
れ、学園自体も休校を余儀なくされた。

このままでは、学力は確実に低下し、大きな問題を残すことにな  
るだろう。この年代の就学子女は、将来的には〈コロナ世代〉  
と呼ばれ理不尽な差別を受けないとも限らないのだ。

「守っているだけでは勝てないよ。闘わなければ。だから、学園  
祭を開くのは大賛成。一般参観は危険という人もいるけれど、しつ  
かり対策すれば大丈夫。逃げてばかりで、どうなるの」

子供は子供なりに考えている。多少エキセントリックでも考え  
ることが大切なのだ。

「学園は、とても暗い。元気もない。明るい学園を取り戻すため  
には、学園祭を成功させる以外にないと思う。一般参観オーケー  
で開く……。それが生徒の願いなの」

「それは、コロナとPTA次第だな」  
「私もそう思う」

千鶴も同感のようだった。「コロナも厄介だけどPTAも手強  
いわ。PTAが理解してくれなければ、学園祭そのものが中止に  
なってしまう。一般参観どころではなくなってしまう」

「そうだな。観客ゼロでは、お前達も力が入らないだろう」

「その通りよ。お芝居は、演じる人と観る人が、ひとつになるか  
ら意味があるのに。観客ゼロではやる気がしないわよ。お祖父ちゃ  
んもPTAの一人なのだから……」

そこまで言った千鶴は急に声を張りあげた。

「おっちゃん！ 気張ってやあ!!」

千鶴は笑い、祖父に抱きついていた両腕に力を込めた。

「でもね」

千鶴はすぐに真顔になった。「万が一、学園やPTAが観客ゼ  
ロでやれと言っても大丈夫だからね」

なぜ、大丈夫なんだ。駄目と言ったり大丈夫と言ったり。忙し  
い娘だ。

「オンライン授業って、知ってるでしょう？ あの要領だよ。ス  
マホやタブレットで参加できるようにするの。感想も即やりとり  
できる。誰でも、どこからでも、私達の朗読劇に参加できる。今  
ね、先生も巻き込んで設計しているの。折角の学園祭をコロナ如  
きの好きにはさせないわ」

この子は、と泰造は思った。この子は確かに変わっている。だ  
が、それだけではない。知的なうえに、困難をのり越えてゆく勁  
さを持っていると。

## 五、

学園祭の開催が正式に決定したと、学園からの通知が届いたの  
は三日後のことだった。

朗読劇の演目が、女子部は更級日記。男子部は平家物語に正式に決まったとも記されている。加えて、コロナ対策には十分に留意し、一般参観の人数制限。インターネットの利用等、概ね生徒の希望が叶えられた形に納まったのは幸いだっただ。

「でもね。私は今度の朗読劇には疑いを持っているの」

千鶴の言葉に泰造は呆れた。

「この期に及んで、何を言い出すのだ。穏やかではないぞ。何か不都合があるのか」

「あるから言うのよ」

千鶴は立ち上がり、キッチンに向かった。冷蔵庫を漁るつもりなのだろう。

「ジュース、飲む？」

「飲まない」

「ビールは？」

「要らない」

「酎ハイは？」

「そうだな」

「どうするの」

「飲もうかな」

「はつきりしなさいよ」

亡妻にそっくりだ。おかしなところが似るものだ。

それにしても、この子は何を疑っているのだ。

「先生が、私にまとめ役、つまり演出をしろって言うのよ。それにクラスの全員が賛成して。あれあれって思っているうちに選ば

れてしまったのよ。これって、おかしくない？」

「別に。お前の深読みだろう」

「そんなことない。間違いないわ。先生とクラス・メイトが結託して、私に押しつけたのよ」

泰造は一笑に付したが、もしかしたら有り得るとも思った。

千鶴は、学園が期待する生徒の一人である点は、間違いない。

しかし、本人は理系には強いが文系には弱い。特に古文が苦手だ。

学園側は、その点を気に懸けて、彼女が興味をもつように画策したのかも知れなかった。もしもそうであつたら有難いことだと泰造は思った。

「でもね、私、決めたの」

千鶴はジュースの一滴をも無駄にしないと宣言ばかりに、天

井を向いて喉を鳴らした。

「何を、どう決めたのだ。お前の言葉はあちこちに飛ぶから疲れるよ」

「私ね、指名された以上は、キ、チ、ン、と決めてやる。そう決めたの。

先生の言いなりになったクラス・メイトも、キ、ツ、チ、リ、働いて貰う。

先生も、無論よ。そうでなければ、私の気持ち収まらないもの」

千鶴は、腕まくりしそうな勢いでまくし立てた。「私ね、誰も

思いつかない更級ノ日記を見せてやるわ。私達の舞台を見た人は、

一生忘れない更級ノ日記になると思う」

変わり身の早い娘だと泰造は呆れたが、この子なら面白い舞台

を見せるだろうと思ひ、出来るだけ協力してやろうと思つた。

「先生が、私にまとめ役、つまり演出をしろって言うのよ。それに

クラスの全員が賛成して。あれあれって思っているうちに選ば

六、

更級日記は、平安中期に記述された我が国文学史上屈指の女流日記である。作者は菅原孝標の娘。当時の通例で名は不明である。

上総国かずさのくに（現在の千葉県市原市）の国司（地方行政の長）だった父孝標が、その任を終え共に京へ帰る十三歳の旅の始まりから書き起こし、自分の結婚、夫の任官とその死に至る約四十年間を日記の形にまとめた一代記である。

文中特に、十三歳の折に体験した九十日に及ぶ道中記は有名である……。

「お祖父さんが知っている更級日記と言えば、この程度だな」

泰造は、古い昔に学んだ淡い記憶を辿りながら言った。「これ以上は無理だ。仕方がない」

「こんなことでムキになって、どうするの」

千鶴は慰めるように言った。「外の人と比べたら、お祖父ちゃんは上等だよ。兄貴なんて「何だ、それ」だって。もしアンケートを取ったら、知らないと答える人の方が多いと思う」

泰造も同感だった。千鶴は続けた。

「だったら、平家物語と比べたら、どちらが多いだろう」

それは、平家物語の方だろう。泰造はそう思ったが、口から出たのは別の言葉だった。

「そんな比較は意味がない。勝ち負けの問題ではないだろう」

「いいえ。私にとっては大問題よ」

その言葉を耳にして、孫の腹の内が見えたと思った。

「そうか。お前は男子部に負けたくないと思っているのだな」

「当たり前でしょ。競演するのだから」

「ま、そうだな」

泰造は曖昧に合い槌を打った。「それで？男子部のまとめ役は誰なんだ？」

「……」

千鶴は口を濁した。

「もしかしたら、洋介か？」

千鶴は返事をしなかったが、正解に決まっている。

「そうか。洋介なんだな。だったら負けられないな」

泰造は頬笑んだ。

洋介こと三崎洋介は、飛び級で千鶴と同学年になった。学園史上初のことだが、それだけ彼が俊英という証しだった。

彼はアメリカの高校に編入される予定だったが、コロナ禍の犠牲になった。

当然、洋介は千鶴にとって気になる存在である。その彼が男子部のまとめ役と知って、彼女の闘争心に火が点いたのだろう。

「やっぱ、洋介には負けたくないもの。だから、お祖父ちゃん、しっかりしてね」

「おい、おい。何でお祖父さんがしっかりしなければならぬのだ？」

「だって。お祖父ちゃんの助言次第で勝負が決まるのよ。お祖父ちゃんはキーマンだよ」

千鶴は、祖父にとんでもない責任を押しつけた。

七、

翌日の夕刻。千鶴が荷物を抱えて現れた。

今夜は泊まると言い、食事も作ると言う。

妻の死後は、近くの赤提灯に頼っていた泰造だが、コロナ禍以降はそうもいかず、孤独な食事に甘んじていただけに嬉しい気持ちと何を食わされるのか不安な気持ち半々で、久しぶりに聴く台所の音を楽しんでいた。

千鶴は張り切った。鰯かれいの塩焼き。胡瓜きゅうりと若布わかめの和え物。牛蒡ごぼうのきんぴら。杏仁豆腐のデザートまで並んで泰造を喜ばした。

話題は、自然に朗読劇のことになる。

「私、決めた」

与えられたテーマの更級日記をどのように料理するか。彼女の関心は、その一点にある。

「朗読劇だから、朗読すればいいとは思わない。朗読劇だって劇なのだから、面白くなければ。そうでしょう？ だから決めたの。日記に書かれなかった裏の事情を、想像力を働かせて掘り起こすの。分かる？」

「分からない」

「いい？ よく聞いて」

千鶴は説明を始めた。活々している。「ここにAという物体があるとする。Aはbとcとdによって構成されている。でも、みんなはAという物体はbとcで構成されていると思っている。そ

こで私達は、そうではないのよ。dも含まれているのよと証明してみせるの。つまり、dが朗読劇の柱になる訳。分かった？」

泰造は、もうひとつ理解できなかった。

「具体的に説明してみろ」

「クラスの子は、すぐ理解してくれたのに」

千鶴は嘆いたが、説明を始めた。「例えば、作者の父孝標は、何故上総国に赴任しなければならなかったか。私は、喜んで赴任したのではないと仮説を立てた。政争の犠牲者だったのよ」

「成程なるほどな」

「当時の京は菅原氏と藤原氏が、権力をめぐって争っていた。孝標は、あの有名な菅原道真を先祖に持つエリート官僚だったが、道真が失脚し大宰府で死んでからは、次代に力を失っていった。丁度その頃は上総国のトップを交代させるタイミングだった。菅原氏ではあるが孝標はインテリだわ。国司には適任だったのよ」

「それで、孝標に白羽の矢が……」

「そうよ。もしも孝標が藤原姓だったら、更級ノ日記はこの世に存在しなかったかも知れない。孝標という人は、出世コースから外れたインテリだったのよ、きつと」

なかなかの推理と、泰造は思った。この子は家族が言う程（困ったちゃん）ではないとも思った。

「それに、上総国って、今の千葉縣市原市でしょう？ 京都からだと相当な距離だわ。そういう土地に家族連れで赴任したということは、京にはもう帰れないと覚悟していたかも知れないわ。だから、帰れると知って一番喜んだのは孝標本人だったかも」

「なかなか面白い」

泰造は三重丸を与えた。「上総の国府は、現在の千葉県市原市といわれている。行ったことはあるかい？」

「ないけど。これも縁だから、一度行ってみようって女子部で話し合っているわ。先生も同行したいって」

「それはいいことだ。お祖父さんは何度か行ったことがある。七十年か八十年になるのかな。お前の亡くなった伯父さんが一緒だった」

目的は潮干狩だった。市原の浜は潮干狩が盛んだった。浅蜆あさりや蛤はまごり。しゃこが面白いように獲れた。鯨はぜや鱧きすもよく釣れた。

「お祖父さん達は、市原の浜新ハマシとかいう舟宿に世話になったものだった。そのお女将さんが親切でねえ……」

彼女のお蔭で古墳を知った。現在、二子塚古墳とか天神山古墳と謂いわれる古墳群だ。

「古墳が存在するということは、その土地が栄えた証しだとも教えてくれたよ」

「クラス・メイトの調査だと、昔、上総の国府があったのは、現在の市原市役所の下みたいよ。市役所は千年を超える歴史の上に建っているんだね」

夜は更けたが、二人にとっては問題ではなかった。

「もうひとつ質問があるけれど、いいかな」

「いいとも」

泰造は上機嫌だった。「その替り、冷蔵庫から鱻からすみ子を持ってきてくれ」

「え？ まだあるの？ 腐ってない？」

鱻子は、そういう類の肴ではない。子供には理解できない肴だ。「早く持つておいで。それで？ 何を訊きたい？」

泰造はグラスを傾けた。正一合の冷酒を時間をかけて味わう。これに会話が加われば、これに優る至福はない。今が、その時なのだ。泰造は嬉しかった。

「孝標の一行は、九月三日に出発したのでしょ。何故、九月三日だったのかしら」

「占ったのだよ」

「そうか。占ったのか」

千鶴は、すぐに理解した。「九月三日と決まった時、娘の気持ちはとても複雑だったと思う」

「どうして？ 十三歳といえは、お前と同じ年頃だ。お前が本人だったら、どう思う？」

「あら。私は十五よ」

「十三も十五も同じようなものだろう」

「違うんだなあ、それが」

千鶴は嘆息してみせた。「二歳も差があったら大きな差よ」

「そうかな」

「そうだよ。十三歳は子供だよ」

「なら、十五歳は」

「十五歳？」

千鶴はちよつと考えて言った。「大人の入口だね。孝標の娘は子供だった。友達と別れるのが辛かったと思う。現代と違って、



もう一生会えないのだから。都への憧れよりも別れの悲しみの方が大きかったかも」

酒がすすんだ。もう半分だけ飲もうと泰造は思った。

「孝標一行は何人くらいだったと思うかね」

「そうね。二十人くらいかしら」

「それでは少ないな。四十人はいたのではなからうか」

酒のせいかな、体があたたかい。

「よく考えてごらん。孝標の家族は五人だ。それに乳母や占い師。京から随行して来た官僚もいただろう。乗り物は、男は馬で女は牛車だっと思う。となると馬や牛の轡を取る男達も必要だ」

「家族を世話する女の人も要るわね」

「そうだろう。家財道具を積んだ荷車を曳く人間も必要だ。それに護衛の武士も必要だ。道中は物騒だからな」

夜は更けたが、二人とも眠くはなかった。幸福な夜とさえ思った。

## 八、

暫く音沙汰がなかった千鶴が現れ、一枚のスケッチを取り出した。市女の絵だった。

市女は、市場で働く女性の総称である。大きな笠を被っているのが特長である。夏の暑い日差しや雨露を防ぐのが目的だが、平安中期には女性の旅行用として定着したと思われる。

笠の縁から薄絹を垂らした〈市女笠〉は当時の女性のファッション

ンだったのだろう。

千鶴は、舞台にあがる演者は、このスタイルにしたという。泰造に文句がある筈はなかった。

泰造は、高校時代に観た映画を思い出していた。黒澤明の〈羅生門〉と溝口健二の〈雨月物語〉だ。演じた京マチ子が美しかった。市女笠の薄布の割れ目から、一瞬見えた彼女の瞳が妖しかった。

## 九、

これが最後の質問と言って、孫が口にした言葉は、泰造の意表を衝くものだった。

「京への旅は九十日。三ヶ月もかかった大変な旅だった。十三歳の作者にとつては苛酷な毎日だったと思うのよ」

「そうだな。大人にとつても大変だったと思う」

泰造も同感だった。

「その長い間、排泄はどうしたのかしら」

「何だって？」

「オシッコとウンチだよ」

この娘は、やっぱり変わっている。

「私ね、以前から不満に思っていたのよ。排泄は人間にとつて、とても大切な行為なのに誰も採り上げようとしない。紀行文の名手といわれる開高健も椎名誠もデービット・リビングストンも書かない。食べる方は熱心に取り上げるけれど、出す方は書かない。

なぜだろう」

「そんな事もないと思うが、食べる多様さに比べたら出す方は単純だからな」

そう答えてから泰造は「莫迦<sup>ぼか</sup>な返答をしたものだ。もう少し気が利いた答えはなかったのか」と反省した。

「男の人は、そこらで済ませればいいかも知れないけれど、女性はそうはいかないもの」

「いや。男だつて排泄には気をつかうさ」

「あら、そうかしら」

「行為中は、どうしても隙が生ずるからな。サバンナの野生動物と同じだよ。それに昔は今以上に疫病が恐ろしかった。だから、我々が考える以上に神経を配った筈だよ。宿場と宿場の距離が思ったより短いのも排泄の事を考えたからではなからうか」

泰造は想像の枠を広げながら、この話題、私も嫌いではないなと思った。

「それに、もうひとつ。大事な問題がある。排泄物は売れたのだよ。大根一本とか二本で交換できた」

「ああ。肥やしにしたのね。そうか。ああ、これですっきりした」  
千鶴は、本当にすっきりした顔をした。

「いい物を見せてあげよう。ちよつと待っていないさい」

泰造は書斎を五分程掻き回し、一冊の写真集を引っ張り出した。写っていたのは、縦四十、横二十五センチ程の小判形をした螺<sup>ら</sup>鈿<sup>でん</sup>塗りの容器だった。

注釈に〈御虎子〉と書いてあるが、千鶴には読めなかった。

「オマルと読むらしい。まるとは放るという意味らしい」

「もしかしたら、これトイレ？」

「察しがいいな。そうだよ。携帯用の便器だよ。高貴なお姫様が使ったようだ。孝標一行の牛車の中にも、用意されていたと思うよ」

「これ、サイコウだよ。みんなも、きつと喜ぶわ」

千鶴はスマホを取り出した。撮影してクラス・メイトに流すつもりだろう。「みんな、凄く喜ぶわ。これで、私達の勝ちだね」

おい、おい。マジか。こんなものまで舞台に乗せるのか。呆れる祖父に千鶴が言った。

「そうよ。これが私の更級ノ日記の柱だよ」

## 十、

泰造は夢を見ていた。

馬に乗っている。従う牛車の御簾<sup>みす</sup>の奥には妻が乗り、何故か御虎子を抱えている。

市女笠を被った千鶴は、止せと言うのに先頭を行きたがる。

武蔵野は、茅<sup>かや</sup>と薄<sup>すすき</sup>の大海原だ。いや、気がつけば、海だ。市原の広々とした海だ。

もう一度、あの浜を見てみたい。工業団地という名の林が連なつて、新しい時代の景観<sup>けいかん</sup>が展<sup>ひら</sup>がっていることだろう。

〈終〉